

タッフが約10名いる。

・中国では「甘藷を食べると長生きできる」という言い伝えがある。よって、その栄養効果、特に、カロチンとビタミンCの多い品種を選んで、食品加工用に使っている。つまり、当研究所では、約600種の甘藷を品種保存しているが、カロチンやビタミンCの含有量の多い6～7品種を選んで食品加工実験している。実際に、3～4年前より、間食用のイモ菓子をつくってマチで売っているが、人気があって需要においつかないくらいだ。その菓子開発のポイントは、カロチンの多いこと、あまり甘くないということだ。すでに、3つの加工工場でサツマイモ製品を生産している。

・江蘇省の甘藷の利用状況は、工業用原料（アルコール・でんぷん・糖類・味の素など）50%、飼料用原料30%、加工食品利用10%、種芋用10%などである。甘藷の加工食品工場（淮陰市）では、カロチン系のイモをベースに、ケーキ・クッキーなどの菓子類、その他に食材として乾燥ポテトフライなどを製造している。その生産は、毎年20%ずつ増えている。研究所の試作段階では、カロチンイモの缶詰・ジュース・ジャムなども作っている。

説明のあとは、約1時間にわたって、加工食品の研究施設や試験畑を見学させていただいたが、印象としては、カロチン系のイモ（南京33号）が多く、加工食品開発にかなり力を入れているように見受けられた。

「川越いも友の会」が 4つの文化賞を

「川越いも友の会」会長
ベリー・ドウエル

1 はじめに

今年の春、わずか1ヵ月の間に、「川越いも友の会」が連続で文化振興賞を4つも受賞した。どのような賞か、以下説明されているが、その前に、さつまいもの消費事情や「川越いも友の会」について、紹介したいと思う。

2 全国のさつまいもの事情

1967年ころから現在まで、1年間における1人当たりのさつまいもの消費量は4～5キロ程度で安定していた。不思議なのは、その間、全国の生産量が半分くらいに減り、全国

の人口が増えてきているにもかかわらず、消費量が一定しているということである。消費量があまり変わらない理由の1つは、その間、飼料用のさつまいもが減りながら、市場販売用の分が増えてきたことである。

3 「川越いも友の会」

「川越いも友の会」はさつまいもを見直そう、という民間団体である。同会の由来は、1982年、川越公民館活動に始まる。川越市制60周年を記念する行事の1つに、「さつまいもトータル学」という講座があった。同講座が川越とさつまいもの関係を見直そうという目的で、歴史や栽培などについての講演、料理講習やいも掘りなどもあった。

「さつまいもトータル学」の講座が終了した後、参加者のいも活動を引き続きやりたいという希望が多かったので、何人かが集まり、1984年に「川越いも友の会」が発足した。ま

ちおこしの役割もある民間団体で、活動はさつまいも祭、さつまいもシンポジウム、さつまいも共同栽培、さつまいも料理講習会、歴史や料理の本や出版などである。

「川越いも友の会」ができたころ、まだまだ社会的にはさつまいものイメージが悪かった。新聞や雑誌やテレビやラジオが同会のさつまいもを見直す活動取材し、これがいろいろな人のさつまいもに対する意識を少しずつ高め、「さつまいもの川越」に良い影響があったようである。

同会にさつまいも加工食品を製造したり、販売したりする中小企業の会員がいる。新聞やテレビなどで騒がれるようになってから、これら、商人たちの会員に良い刺激があり、彼らは張り切って新しい製品を作り始めた。麺類、アイスクリーム、和洋菓子、料理、などいろいろと工夫し、今では、日本中の消費者に紹介できるようになった。同会の一般会員も、商人の会員に新しい製品を提案したりして、それによってさらに刺激されている場合もある。

川越では、「川越いも友の会」の活動を通して、さつまいも加工食品の製造や料理方法、他の地域からのさつまいも加工食品の仕入れも少しずつ増えている。

4 4つの文化賞を受賞

今年の5月13日に、7年前にできた「川越いも友の会」の初めての受賞は財団法人埼玉県農協福祉事業団の第3回農村地域文化賞の最優秀賞である。副賞20万円もいただいた。推薦者の川越市農協には、大変感謝している。受賞した理由は、「川越いも友の会」の活動が、日本のさつまいも文化の拠点となっていることである。又、さつまいもを通した国際

交流は海外まで及んでおり、日本農業に対して新しい視点を与えていることである。又、営農面では技術の伝承、地域農業振興に大きく貢献し、川越の観光イメージ向上にも、大きな力を発揮していることである。

6月4日、埼玉新聞の推薦により、「川越いも友の会」が財団法人サントリー文化財団のサントリー地域文化賞を受賞した。副賞100万円もいただいた。今年の贈呈式は13回目で、77賞の中で、食文化の活動の賞では4回目だそうである。受賞理由は、同会が栽培農家、農業技術研究者、いもの歴史・文化研究者、焼酎博士、プロのいも料理人、いも食品製造者から学者、サラリーマン、主婦など、おイモを愛する人たちと学術的研究者による市民グループであるということである。又、品種・栽培・加工・流通・料理・歴史・文化についての研究会やシンポジウムの開催、『川越いも入門百科シリーズ』などの出版活動、世界各地で開かれる学会への出席や海外への調査団派遣、「サツマイモ資料館『いも倶楽部』」への支援、「いも料理講習会」「いも夕食会」「川越いも祭」の開催、他地域の団体との交流など、徹底的にイモにこだわる多彩な活動を行なっていることである。

6月2日から6日まで、米国アラバマ州モントゴメリ市で、国際さつまいもシンポジウムが行なわれた。主催はタスキギ大学やNASA（米国航空宇宙局）や米国農務省などで、私は「川越いも友の会」の会員6人を連れて参加した。私達は、日本のさつまいも料理実演や試食、3つのポスター発表をした。私は研究発表をした。シンポジウム実行委員会が私達の熱意に感心し、さつまいも文化振興感謝賞を与えて下さった。

6月15日、川越市観光協会から団体賞を受賞した。理由として、いもの品種・栽培・文化・歴史の研究など、そのユニークな活動が、川越を全国に向けていも文化発信基地にしているということである。

5 文化賞を受賞しての感想

「川越いも友の会」ができて以来、今年、初めて数々の賞を短期間に受賞し、私は同会の代表として、大変嬉しいと思っている。

私は、「川越いも友の会」ができる以前からさつまいもの文化活動をやっている。私は何となく、シャーロック・ホームズの著者であるコナン・ドイルのことを思い出す。医学博士のイギリス人、ドイルは短編小説を書くのが好きで、シャーロック・ホームズの話のほかに、様々な物語を書いた。

ドイルは自分の患者があまりいなかったので、文学を書くことの方に興味を持つようになった。

1887年に、ドイルの初めてのシャーロック・ホームズを扱った推理小説が出版された。次は1890年に出版された。少しずつ人気上がり、1891年7月から、毎月『ストランド』誌

に載せられた。そこで、1893年12月、『ストランド』誌のホームズのシリーズの最後の話で主人公ホームズが死んでしまった。そのシリーズが大変人気があったにもかかわらず、彼が主人公を死なせてしまったのは、面白い。それは他に書きたいものや活動があったので、ホームズについて終結させてしまった。けれども、ホームズがなくなったとき、読者から反響が大きく、結局、完全にやめることができなかった。

他の活動などで頑張ってみたが、ドイル自身、ホームズのことでは有名になっていたため、1893年以降は、又、ホームズの話を書き始めたようである。つまり、現在、コナン・ドイルといえば、すぐ、シャーロック・ホームズを連想する。

ドイルの例は、「川越いも友の会」と似ている。それは、「川越いも友の会」のほとんどの会員の仕事はさつまいもとそれほど関係ない。私の場合でも、大学で英語を教えている。

同会が始まったときは、秋がさつまいもの収穫時期なので、それ以外の季節のいも活動

常識法話

◆ 夫婦異姓 ◆

女性が、社会的進出を図った余波であろうと思うが、近く婚姻法を改正して、夫婦別姓、つまり、女性は旧来の姓をそのまま名乗ることができるようにするということが云々されている。

今までは、「籍を入れる」ということは、男の姓を名乗ること、それが「晴れて、夫婦になった証拠」であったが、これからは、異姓ではあるが、正式に婚姻した仲だということを、どうして立証するかが、大きな

社会問題となろう。

さし迫って困るのは、ホテルのチェックインで、異姓ではあるが、正式の女房なのだというトラブルが発生するだろう。そのためには、常に戸籍謄本を用意しておいて、いつでも、どこでも提示できるように準備して置くことが必要となろう。

有名になりすぎた女性を女房にする夫婦は、新聞に3回以上広告して、異姓夫婦となることを告知する必要があるかも知れない。どうして、こう云うことを考えるか分からない。

は少なかった。しかし、現在では、秋の活動を中心に1年中、活動を行なっている。

何年前か、一度だけ、会員の1人がこれ以上さつまいも活動をして意味がないと言ったが、私はまだまだ会の活動があると考えている。社会の影響で、会員が刺激を受け、場合によっては、さつまいもの活動が本職より重要になってきた会員もいる。

6 受賞記念会

「川越いも友の会」が4つの文化賞を受賞したので、7月16日受賞記念会を開いた。その賞の贈呈代表者を招き、会員と懇談し、これからのことも話し合った。その時、今まで、「川越いも友の会」が大変お世話になった埼玉県園芸試験場鶴ヶ島洪積畑支場に感謝状を贈呈した。同試験場は「川越いも友の会」の

理事の1人の勤め先であり、同会の発足以来、さつまいも専門技術の提供、珍しい品種の手配、などの援助をいただいている。

7 「川越いも友の会」のこれから

1991年が「川越いも友の会」の受賞記念の年である。時期的には大変良い。1992年が、コロンブスのアメリカ大陸発見以来500周年記念、「さつまいもの川越」の市制70周年記念、「川越いも友の会」の先祖、川越公民館講座「さつまいもトータル学」の10周年記念などである。今年の同会の受賞の刺激もあり、なお、次年の記念行事に力を入れる予定である。全国さつまいも祭、全国さつまいもシンポジウム、『平成甘藷百珍』という料理集の出版、などを企画中なので、ぜひ、応援し、参加してほしい。

第3回アジア馬鈴しょ研究会 開催される

日本種馬鈴しょ協会顧問 塩田 弘 行

■アジアの各地から

去る6月17日より22日まで、第3回アジア馬鈴しょ研究会が、赤道直下のインドネシア共和国、西ジャワ州の州都で海拔700mの高原にあるバンドン市で開催された。

参加国は日本、韓国、台湾、バングラディッシュ、フィジ、インド、インドネシア、マレーシア、ネパール、パキスタン、フィリッピン、スリランカ、タイ、ベトナム、その他オーストラリア、ペルー、カナダ、イギリス、オランダ、イタリーなどで、参加者は約90名であった。

日本からは日本種馬鈴しょ協会顧問塩田弘行のほか、カルビーポテト株式会社常務取締役

役知識敬道氏、農水省北海道馬鈴しょ育種研究室森元幸氏、また国際ポテトセンター(CIP)の研究員になっている渡辺和男氏が、ペルーより参加していた。なお開催国インドネシアからは多くの研究者が参加したが、その中には、日本から国際協力事業団の専門家として、同国に馬鈴しょ関係の技術指導に派遣されている、元農水省種苗管理センター十勝農場長の青木忠文氏も参加していた。

会場となったのは、反植民地主義運動に影響をなしたと言われる1955年のアジア・アフリカ会議の会場となり、現在独立記念館となっている建物の近く、アジア・アフリカ通りに面した由緒あるサボイ・ホームマン・ホテルで